

飛ばない教室

または、

わたしのいない

その場所

前川麻子

配役

柿生

大柿友哉

栗次郎（くりじい）

のへ

桃太

たいが

少女（鈴木）

なう

月山

津嘉山

曜子

小島

日比（ビービー）

高村





## # 1 オープニング

舞台上には、あらかじめいくつかの箱が置かれている。

制服姿の出演者が順に来て壁際に並べられた椅子（待機

席）に着席する。

ブツブツとセリフの練習をする小さな声が重なっていく

中、栗次郎の声が聞こえる。

くり あ頃は毎日がキラキラしてた。風が頬に当たるだけで面白

かったし、陽射しの眩しさや、足元の影が揺れるのも面白く

って、面白いって感じる自分の気持ちがかくすぐったくて、い

つだってクスクス笑いが喉まで込み上げてるみたいなの、そん

な気分の毎日だった。きっと大人になって振り返れば、本当

に短い、一瞬だけの出来事なんだろうけど、その時には、そ

れこそが毎日で、人生で、永遠だった」

暗転。

## # 2 倉庫

薄闇の中、大きな音を立てて外扉が開けられる。

手をガムテで括られ、頭にコンビニ袋を被せられたジャ

ージ姿の少女が、外から転がり込むように入ってくる。  
ジャージの胸に、大きく「鈴木」と書いた布が縫い付け  
られている。

すぐ後から、息を荒げた柿生。

倒れ込んでいる少女を荒っぽく抱え起こし、下手奥にあ  
る小さな空間に連れていき、置かれている椅子に座らせ  
ると、ガムテで少女の足を椅子に括る。

パアン！と、表を通るトラックのクラクション（SE

）。

びくっと身を竦めたのは、少女ではなく柿生。

静寂の中、少女がコンビニ袋の中で苦しげに喘ぐ声が響  
いている。

柿生、袋を乱暴にもぎ取る。

少女 「わたしたちはどこにもたどり着けない、っていうか、わたし

たちが歩いた分だけ、いや、わたしたちより何倍も何十倍も  
速く、宇宙とか世界とかも拡がってて、」

うわ言のように呟く少女の口にガムテが貼られる。

# 3 部室（並行）

栗次郎がスマホをいじっている。

# 4 倉庫（並行）

柿生のスマホにラインが届く。

柿生、すぐに返信し、もう一度届いたラインを確認すると、椅子に縛られた少女をスマホで撮影し、画像を送信しながら足早に外扉から出て行く。

取り残される少女。

暗転。

# 5 部室（並行）

スマホに届いた画像を開く栗次郎の元へ、桃太が来る。

桃太 「ちよ、ねえ、くりじい」

くり 「うん」

桃太 「ねえ」

くり 「見た？」

桃太にスマホの画面を見せる栗次郎。

桃太 「え」

くり 「やばくね？」

桃太、栗次郎のスマホを覗き込んでから自分のスマホを  
確かめる。

くり 「やばいっしょ、まじこれ」

桃太、自分のスマホを見ながら、

桃太 「きたこれ、まじやばい」

くり 「やばいよね、まじやばいよ」

桃太 「やあ、これやばいでしょ、メガやばい」

くり 「メガやばい、メガやばい」

桃太 「目がヤバい、目がヤバい」

くり 「メガどころじゃなくね？ ギガやばいっしょ」

桃太 「ギガやばい、ギガやばい」

くり 「な、ギガエロいよなあ」



桃太と栗次郎がそれぞれのスマホに見入っているところ

へ、曜子がくる。

曜子 「なに？」

曜子、栗次郎のスマホを覗き込む。

曜子 「うっわ、なにこれ」

桃太 「やばくね？」

曜子 「え、まじ？ なにこれ？」

桃太 「やばいっしょ、ギガやばいよね」

曜子 「ほあ？ え、うそ、これどうなってるの」

月山がくる。

少し後ろからついてくるように日比。

月山 「(曜子たちに) ソーリー、寝ぼった」

曜子 「月山、みてこれ、超やばいのきた」

月山 「なに？」

くり 「言うなよ、お前ら、言ったらヤラれるぞ」

月山 「え、なに、ヤラれるって」

桃太 「そりゃそうでしょ、やばいってこれまじで」

曜子 「言わねえし、つうか言えねえし」

月山 「え、なに、暗くてよくわかんないんだけど」

くり 「これ言ったらまじやばいから」

月山 「え、これなに？ 人？ え、人？」

曜子 「送って送って」

桃太 「だめ」

曜子 「なんで」

くり 「マジでやばいから」

曜子 「鍵かけるから」

桃太 「絶対だめ」

月山 「え、ちょ、まじでわかんなかったんだけど」

少し離れたところにいる日比のスマホにラインが届く。

日比、皆を気にしながら、確かめる。

くり 「あ、時間やばくね」

曜子 「あ、そうだ、行こうよ」

月山 「ちょ、あとでじっくり図解で説明して」

くり 「いや、もうほんとやばいから、これ終了だから」

月山 「なにそれ、ずるくない？」

桃太 「なんでわかんないんだよ」

言い合いながら、日比を気になげず、去っていく月山・

曜子・桃太・栗次郎。

日比が取り残される。

日比、スマホのムービーで自撮りしながら、話す。

日比 「わたしには、友達がいませんでした。挨拶をしたり、笑いあったりする誰かはいつも周りにいたけれど、秘密を打ち明け合うような友達は、ずっといませんでした。だから、演劇を始めました。演劇は、わたしではない誰かになることができるところから」

月山が、日比に声をかける。

月山 「ビービー、来ないの？ 始まるよ」

日比 「みんなと一緒にいられるなら、演劇じゃなくてもよかったのかもしれない」

日比、スマホをしまつて去る。

転換。

男子が箱を積み上げ、エリアの一角に小さなステージが  
組まれる。

女子は待機席でジャージに着替える。

月山は、ここでも皆から出遅れてモタモタしている。

## # 6 ステージ

箱を組み終えると、栗次郎がステージに上がる。

皆はばらばらな場所に座り込み、栗次郎に注目する。

くり 「じゃあ、始めます」

まばらな拍手。

くり 「ええと、じゃあ、まず、去年の大会の結果について、各々の反省点を述べてください」

桃太 「もしも、この先本気で勝ちに行くなら、きっと楽しいだけじゃ済まされない。君たちにもそれなりの覚悟を求めることになりませう」

曜子 「それ、幕が上がるのセリフじゃん」

桃太 「結果、人生を狂わせることにだって、なるかもしれない」

曜子 「あの映画がヒットしたせいで、大会の優良賞が参加賞だって全国にバレたんだよ」

桃太 「でも、負けは負けじゃないですか」

月山 「いや、それは慰め合っているときに言わなきゃ」

くり 「そりゃまあ、負けは負けだよなあ」

桃太 「つうか鈴木きてなくね？」

月山 「天体さ、演劇のことが世の中に広がる乗ってあんま嬉しくなくない？お客さんに演劇部ですって話して、その割には滑舌悪いじゃないとか言われるとイラッとくるもん」

曜子 「それな。それまでは正月に集まった親戚から優良賞？すごいねえって言われてちょっといい気分になれたのに」

月山 「やっぱジョジョは無理あったでしょ」

桃太 「いや、ラストの全員のジョジョ立ちシルエットはかっこよかったですと思うよ」

月山 「そりゃあんだけふんだんにバックサス使えば決まるでしょ」

桃太 「でも、負けは負けじゃないですか」

月山 正直さ、解釈が追いついてない感じあったよね」

くり ジョジョ立ちの練習で目一杯だったからな」

月山 台詞がどどどどどかごごごごとかばっかだったし」

曜子が手を挙げる。

くり 曜子」

曜子、立ち上がる。

曜子 「えーと、皆さん、都大会お疲れ様でした」

皆が口々に 「おつかれさまでした」 と返す。

曜子 「お疲れ様です。私は、今回の公演で、自分なりの目標を持っていたんですけど、あ、目標っていうかなんていうか、その、

イメージっていうか、こういうふうにやりたいとか、できたらしいなっということがあって、それがやっぱり、今いちうまくできなかったっていうか、」

桃太 「え、自分だけ？」

曜子 「ちがうちがう、全体的なことだ」

桃太 「ほ？ 全体？ なんでお前が勝手にイメージとかするわけ？」

曜子 「ちがう、だから、自分なりのもって言ったじゃん」

桃太 「え、お前なりのイメージ通りにできなくて、それ俺らの反省点ってこと？」

曜子 「じゃなくて」

桃太 「ほ？ わかんないんだけど」

曜子 「だから」

桃太 「お前なりのイメージと違って、俺ら聞いてなくね？」

曜子 「だからさ」

桃太 「お前それ言った？ 俺らに」

曜子 「言っていないよ。だから自分なりの、って」

桃太 「それちがくね？」

曜子 「なにが」

桃太 「だってそれ、そもそも話ちがくね？ 自分なりのイメージとか  
か

って、なにそれアリ？ そんなみんな色々な色々あるんじゃないか  
の？ みんな違って当たり前じゃね？ だから、いっこ大きな  
括りの目標作ってんじゃないか？ なに、お前それガン無視

っ

てこと？」

曜子 「じゃなくて、それはそうだけど、じゃなくて」

桃太 「ほあ？ 否定してんの、肯定してんの、どっち？」

曜子 「だって、そんなのわかんないもん。みんなの目標なんてさ、いちいち確かめ合ったりしないじゃん、気持ち悪い」

桃太 「気持ち悪いけど、そういう活動なんだからしょうがねえじゃん、演劇ってさ」

月山 「え、みんなの目標ってというか、それって、演出に従うとか、そういうことじゃないの？」

曜子 「そうだよ」

月山 「え、気持ち悪いってそれ？ そんなこと言ったら演劇とかで  
き  
なくない？」

桃太 「え、なに、今の段階でそういう話？」

月山 「じゃさ、桃太の言うみんなの目標って何なの」

桃太 「俺、みんなの目標なんて言ってないでしょ、大きな括りの目  
標だったの」

月山 「わかった、じゃそれ、なに」

桃太 「演出だよ」



曜子 「だから、演出に従うのは当たり前のことだけど、それ他にも、自分なりの目標みたいのがあって」

桃太 「だからそれがいらなくね？ っつってんだよ」

曜子 「なんで」

くり 「いや、でも俺もそういうのあるよ」

曜子 「ほら」

桃太 「知ってるよ、くりじいは台詞噛まないようにとか、そういうことじゃん」

くり 「うん」

月山 「ごごごごご、ばっかだったじゃん」

桃太 「それはいいんだよ、でも曜子が言ったのはイメージだよな、原作でも演出でもない、自分なりのイメージ？ 目標？」

くり 「え、台詞噛まないとかじゃなくて？」

曜子 「まあ、それとはちょっと違うかな」

桃太 「ほら」

月山 「じゃあさ、まずは曜子の言う曜子なりのイメージってどんなんだったか聞こうよ」

曜子 「え、いいよ、もう別に、終わってるんだし」

くり 「終わってからするのが反省会だろ」

曜子 「そうだけど、じゃなくて、それはそうなんだけど」

桃太 否定か肯定かはっきりしない相槌すんじゃないよ

曜子 「だって、負けは負けとか言ったら反省にならないじゃん」

月山 「いいじゃん、言ってよ、曜子なりのイメージ、どんなだったか」

桃太 聞く意味なくね？」

くり 「いいだろ、反省会なんだから」

曜子 「だからさ、演出に従うことは当たり前なんだけど、私は、そういうこととは別に、もっと気持ち込めたかったなあっていう反省があって」

桃太 「ふうーん」

曜子 「イメージとかって言ったから混乱させたけど、そういうところも反省だった」

月山 「ああ、そういうことか」

くり 「え、それ、台詞噛まないようになっていうのと、同じレベルじゃないの？」

曜子 「いや、それと一緒にされるのは違うかな」

くり 「なんで」

曜子 「なんでって、演劇やるんだから、台詞噛まないの当たり前じゃない」

くり 「え、そう？」

曜子 「だって、台詞噛まないのは練習すればいいだけじゃん」  
くり 「練習したけど、噛むんだよ？」

月山 「噛むっていうか、くりじいの場合、どもりだよね」

くり 「ど、ど、ど、ども、ども、どもってないだろ」

桃太 「だから、どもりの役にしたんじゃない」

月山 「まじか、あのごごごごは、どもってのごごごごか」

曜子 「くりじいだけ、いっつもアテガキじゃん」

桃太 「それでも噛むから」

くり 「緊張すると駄目なんだよね」

月山 「そもそも、台詞噛むのと、どもるのと、どう違うのかわかんないけど」

くり 「ども、ども、どもってないよ。噛んだけど」

曜子 「だって、アテガキで喋るのと、そうじゃない役で喋るのとじゃ、使う技術が違うじゃん」

桃太 「ふうーん」

曜子 「桃太、さっきから人のこと思いっきりバカにしてるよね」

桃太 「いやいや、ばかにしてないですよ」

曜子 「絶対してる」

桃太 「皆さんご立派だなあって感心してるだけ」

月山 「え、ご立派ってなに？」

桃太 台詞に気持ち込めるとかき、技術のレベルとかき、え、何それ、演劇歴何十年の反省？」

月山 反省に演劇歴関係ないでしょ」

桃太 あるでしょ、ちょっと何、みんなどうしちやったの？ 俺ら

高

校生じゃん、演劇って高校演劇じゃん、高校演劇って部活動じゃん、部活で大会目指すのなんて演劇歴に数えないでしょ、

人生すら始まってないんだから」

月山 「えー、桃太、そういうこと言う？」

曜子 桃太はそりゃ子役の経験とかあってプロの現場知ってるから  
そう思うんだろうけどさ」

桃太 「ちげえって、世の中の視点があるかないかだって」

月山 「世の中の的ってなに？」

桃太 「なになに訊くなよ、うぜえなあ」

曜子 「そうだよ、世の中って何よ」

桃太 「だからさ、世の中の人が思う高校生らしさとか、若者とか少年少女のイメージってのがあってでしょ、それって、俺らの実体とズレてるでしょ」

月山 「まあ、んなやつあいねーよ、って感じだよね」

桃太 「でもさ、結局俺らに求められてるのは、そこじゃん。自分たちらしくつつたってさ、セフレが三人できましたーってネタは上演させてもらえないんだからさ」

曜子 あれがポツにされたのは、それだけじゃないって」

桃太 高校生かくあるべしをやってくの、しんどくね？」

月山 「でも実際あたしら高校生だしなあ」

桃太 「リアルとアンリアルの狭間っつうの」

くり 「でもさ、俺らには今ここでの時間しかないからさ」

桃太 「でた、青春論」

月山 結局さ、かくあるべしをわざわざやらなくても現実的に高校生でしかないわけじゃん。一番高値がつく高校時代に演劇とかやってるあたしら、ってのがそのまま世の中の的な高校生のイメージってことでしょ」

桃太 「それって構造的にはメタだよね」

くり 「いや、青春は振り返って味わうもんで、真っ只中の俺らには青春かどうかわかんねえって話」

曜子 「そもそもさ、桃太だってしょせん子役じゃん、AKB48みたいな青春丸ごと捧げてきたわけじゃないんだし」

くり 「でもまあ、少なくとも俺たちは桃太を同等に思ってるよ、お前だって言ってたじゃん、子役なんてピアノのお稽古ごとと

同じだって」

桃太 「そうだよ」

月山 「あたしらの世の中は今ここでやってることがすべてじゃん。

世の中じゃなくて日常だし学校だし、芸術じゃなくて部活動だし」

くり 「その点では桃太も俺らも何も違いはないと思ってるけどね」

曜子 「だけどさ、演劇は演劇じゃん」

桃太 「じゃあさ、俺、反省点言っている？」

くり 「いいよ」

桃太 「俺、もう演劇やりたくない」

みな、言葉に詰まって短い沈黙。

桃太 「ぜんっぜん、愉しめなかった、ごめん」

曜子 「なんでよ、作・演やったから？」

くり 「それはさ、勝てなかったから、結果、そう思うってことだろ。

口惜しいってことだよな」

月山 「そうだよ、やっているとときは楽しいんですけど、だったらみんなおんなじだと思うよ」

曜子 実際さ、勝ち負けだけじゃなくてさ、桃太だって私だって、やっぱり自分なりに到達したいところがあったさ、そこにたどり着けなかったって口惜しさがあるよね」

桃太 違うんだよ」

くり 嘸んで、ごめん」

月山 あたしも、出トチってごめん」

曜子 決め台詞忘れてごめん」

くり ドイツの下にサポーター履き忘れてごめん」

曜子 月山の衣装こっそり破いてごめん」

月山 衣装こっそり破かれてるの気がつかないままパイオツ出してごめん」

くり 「それ見て舞台上で勃起してごめん」

桃太 「いやむしろ、生きててごめん」

くり 俺、やっぱり練習足りなかった」

月山 あたしも」

くり 親父がまた暴れてさ」

曜子 またシェルターなんだよね、くりじい」

くり 「しかも、今、俺も追われててさ」

月山 やっぱり！ 柿生先輩でしょ」

曜子 「だから、練習来なかったんだ」

月山 「くりじいと柿生先輩ってまじクサレ縁なんだね」

曜子 「あの人、6年学校いたんだよね」

くり 「リーチメンチントイトイサンアンコーで三倍満だから」

月山 「なにそれ」

曜子 「二年二回やって二年も二回やって三年も二回やってる」

月山 「学校好きなんだね」

くり 「俺、今度捕まったらまじ山に埋められるから」

桃太 「まあ、くりじいはどれだけ逃げ回っても必ず本番には来て

くれるからいいけど、消えた奴もいるからな」

月山 「根に持つなあ、あん時はバイトだったんだって」

桃太 「お前じゃねえよ」

月山 「あ」

音楽。月山と日比を残して、みな去る。

転換。

男子が箱を動かして、ベンチを組み上げる。

## # 7 公園

ベンチに日比が座っている。



それを背景にした月山、喋りだす。

月山 「くりじいのお父さんはしょうもないヤクザもんで、くりじい

が小さいときから、くりじいとお母さんをしこたまぶん殴って  
いたらしい。その話を聞かされたとき、正直みんなドン引きして、  
桃太が、そんな親父殺っちゃえよ、って言ったけ

ど、

やさしいときもたまにあるからなあって、くりじいは笑って  
だから、今はもう誰もそんなふうに言わない。それとは別

に、

くりじいはくりじいで手癖が悪いのでめっちゃ有名だったか

ら、

ハングレのヤバイ先輩に追われてるのもしょっちゅうで、それ  
れももう今では誰も気にしなかった。人生はサバイバルだな  
あと思う。部室や教室で毎日顔を合わせていた誰かが、ある  
日、ふっといなくなる。わたしたちが、あって気づいたとき  
には、テレビのニュースになってたり裏アカで拡散されてた  
りする。そこで知る誰かは、昨日まで一緒にいたはずの誰か  
だったのに、もうわたしたちには思い出せない、別の誰かに  
なっちゃうような気がする」

日比 月山

呼ばれた月山、振り返る。

日比 なに見てんの？」

月山 「え、ああ。小さい子、かわいいなって」

日比 やっぱり、産みたかったんだね」

月山 「いやいや、無理でしょ、現実的に。ていうか墮ろしてないし、

むしろ孕んでもいない」

日比 寒いね」

月山 「ビービー、いつからそこにいた？」

月山、日比の隣に腰掛ける。

日比 学校行かなかったから」

月山 ずっといたの？」

日比 うん、ずっといる」

月山 あ、チョコ食べる？」

日比 食べる」

月山 「ゴディバだよ。有り難く食べな」

日比 「ありがとう」

月山 「客にもらった」

日比 「バイト、楽しい？」

月山 「楽しいわけないじゃん、キャバクラだよ」

日比 「ガールズバーじゃないの？」

月山 「順調に堕ちてってるよ」

日比 「まっしぐらだ」

月山 「栗年は小岩あたりに流れ着いてるかな」

日比 「マックとかにすればいいじゃん、楽しいよマック」

月山 「マックかあ。時給いくら？」

日比 「高校生950円」

月山 「不思議じゃない？キャバとかガールズバーとかは高校生だ

と

時給3000円くらいになるのにね、すごい不思議、略して

S F」

日比 「触られないからじゃない？」

月山 「売り物は同じじゃん」

日比 「お酒出さないよ」

月山 「スマイル売ってんじゃん」

日比 「そうだね、マックのスマイルはタダだもんね」

月山 「うちの店は座って4800円」

日比 「1800円搾取されてんだ」

月山 「安心料かな」

日比 「安心なんだ」

月山 「ぶらぶらしてるより安心でしょ」

日比 「ぶらぶらって」

月山 「お散歩とか、お昼寝とか」

日比 「そっちもアリなんだ」

月山 「しないよ。捕まったら親泣くじゃん」

日比 「泣く親がいるだけマシじゃん」

月山 「ビービーだっているじゃん」

日比 「いるいる、普通にいる」

月山 「あたしら、まともな方だよね」

日比 「だね」

月山 「まとも過ぎるよね」

日比 「だね」

月山 「日比さ、こないだの公演、どうだった？」

日比 「面白かった」

月山 「ほんと？」

日比 「うん。月山も曜子も、女優さんみたいでキレイだった」

月山 「けっこう盛ったからね」

日比 「曜子の長台詞とか、すごい良かったし」

月山 「もう部活ないなんて変な感じだなあ」

日比 「月山、演劇やめちゃうの？」

月山 「就職見つかるまでバイト三昧だろうね」

日比 「すごいお金持ちのパパ見つけてさ、スポンサーになっても  
らえばいいじゃん」

月山 「それいいね。弟の面倒も見てくれるかな」

日比 「見てくれるかも」

月山 「がんばろう」

日比 「そしたら月山、演劇続けられるじゃん」

月山 「日比だって、こないだの大会、出れば良かったじゃん」

日比 「んー、でもほら、演劇部って女子多いし、いたらいたで何か  
役作ってもらうことになるじゃん」

月山 「ビービーはビービーのまんまでいいのに」

日比 「無理無理、あたしなんかじゃ物語にならないよ」

月山 「それもそうだ」

日比 「あたしのまんまじゃ、みんなに迷惑かけるよ」

月山 「じゃあ、あたしバイトだから行くね」

日比 「うん」

ベンチを立った月山、残った日比を振り返る。

月山 あとちょっと一緒に座ってれば良かったと、今も思う」

独り言のように呟き、月山、去る。

残された日比、ベンチの上に立ち上がり、スマホでムー

ビーの自撮りを始める。

日比 月山は、いつかきっと、わたしのことを忘れてしまうんだと思う。たぶん、わたしがそこにいなかったことも思い出せなくて、そのことに、月山はひどく傷ついたりする」

日比、ベンチの上でゆらゆら揺れて、ふらっとベンチから落ちる。

音楽。ゆっくりした足取りで日比が去る。

転換。

男子が箱を組み替えると、テーブルと椅子になる。

# 8 ファミレス

桃太と曜子が向かい合って座っている。

桃太 「なんだよ」

曜子 「桃太ってさあ」

桃太 「ほあ？俺？」

曜子 「……」

桃太 「今日、なんで2年来なかったんだよ」

曜子 「ああ」

桃太 「あり得なくね？」

曜子 「知らないよ」

桃太 「あり得ないでしょ」

曜子 「風邪とかインフルエンザとかバイトとか正月ボケとか、あるでしょ、いろいろ」

桃太 「いや、あり得ねえって、まじで」

曜子 「桃太、まじでまじでって真面目に考えてた試しないよね」

桃太 「ほ？まじ、お前、殺すぞ」

曜子 「そうやってしぼりつけたり押し付けたりするから、部員いな

くなるんじゃないの？」

桃太 「じばりつけたり押し付けたりしないと練習しねえからだろ」

曜子 「言ってること矛盾してるから」

桃太 「どこが」

曜子 「だが部活みたいなこと言ってるくせに、命賭けろみたいなやり方するじゃん」

桃太 「まあね、美学つつうの」

曜子 「ほあ？」

桃太 「だがが部活に命賭ける方が面白えじゃん」

曜子 「ほら、矛盾じゃん、それ」

桃太 「何がだよ」

曜子 「愉しめないから辞めたいって言ってたじゃん」

桃太 「言ったよ、事実だもん」

曜子 「じゃ今すぐやめれば？」

桃太 「そうはいかねえ」

曜子 「引き留められたいだけじゃん」

桃太 「ほあ？ 俺、お前ほど真剣に演劇のこととか考えてないよ」

曜子 「うそつけ」

桃太 「だってそんなん、意味ないだろ、プロ目指すわけじゃねえし」



曜子 プロじゃなくなたって、ちゃんと卒業して大学行って、また違う仲間と演劇やったらいいじゃん」

桃太 「それ、虚しくね？」

曜子 「だって、あたしもう引退じゃん、さっさと引導渡せばいいじゃん」

桃太 次の部長も決まってないのに引退できないでしょ」

曜子 「ほ？ 部活だよ？ 3年いなくなれば勝手に誰かが部長になって、そのままやってくに決まってるじゃん」

桃太 「くりじいがいるじゃん」

曜子 「くりじい、もう5年もいるじゃん」

桃太 「まだ4年だろ」

曜子 「ほ？ え？ もしかして、くりじい部長にしようとか思っているの？」

桃太 「見過ごせない存在だよな」

曜子 「いやいや、そこは見過ごそうよ」

桃太 「俺もさ、よもやくりじいに部長が務まるとは思っていないよ。でもさ、反省会にこない2年を部長にするのもどうなのって話じゃん」

曜子 「だから、もうそういうことは、考えなくていいでしょ、引退なんだから」

桃太 「つうか、俺ら引退したら、部員何人よ」

曜子 知らないよ、今いる子たちが残るかもわかんないし」

桃太 だろ」

曜子 別に、人足りなかったら勝手に集めるでしょ」

桃太 「お前、受験すんの？」

曜子 「え？ するけど」

桃太 「じゃいいよ、お前引退して」

曜子 するし、言われなくても」

桃太 俺、残る」

曜子 残るって、なに、留年するの？」

桃太 今、単位ギリのいっこあるから、それ落とせば普通に留年っしょ」

曜子 「いやいや、それ取れば普通に卒業っしょ」

桃太 補講とかまじだりい」

曜子 「いいじゃん、補講受けるだけで単位もらえるんだから、温情措置だよ」

桃太 気が進まねえ」

曜子 「あのさ、そういうの、まじ迷惑っての、わからない？ あたし

らは残ったのがくりじいだったから良かったけど、あれもし

去年残ったのが柿生先輩とかだったら、地獄じゃん」

桃太 「それギガ地獄」

曜子 「でしょ、あんたが部活のためにわざわざ単位落として残留するのとか、2年に迷惑だし」

桃太 「いやいや、俺そんなキャラじゃねえし」

曜子 怖くて近寄れない先輩より親しみやすく距離取れない先輩が一番うざいから」

( # 8 A 一年前の部室・回想 )

いつの間にかいた柿生が、大きく手を鳴らす。

曜子と桃太、ビクッと飛び上がるように反応する。同時に、待機席の月山と日比もビクンと柿生に注目。

柿生 練習しないのかよ」

慌てて箱を後方に押しやる桃太と曜子。

全員が部屋の奥に整列し、緊張して柿生を見つめる。

柿生、後輩たちを一瞥して、おもむろに発声。

柿生 「あー」

端から順に、ハモっていく後輩たち。

美しいハーモニーになると満足げに頷く柿生、指揮者のように発声を取りまとめ、貧乏ゆすりを始める。

後輩たち、顔を見合わせながら、柿生の顔色を伺う。

柿生 「入れよ、カウントとってんだから」

後輩たち、カウントがなんのことだかわからず戸惑う。

再び柿生の貧乏ゆすりが始まって、後輩たち合点。

柿生 「入れよ、カウントとってんだろ」

柿生、今度は大きな貧乏ゆすり。

後輩たちはそれを凝視して、バラつきながらおずおずと歌い始めるが、歌が揃わない。

柿生 「ああ？」

後輩たち、萎縮と緊張で既に泣きそう。

柿生 「予ームワークねえなあ」

渋々と言った風に吐き捨てる。

緊張に耐えきれず、栗次郎が皆に小声で合図する。

くり 「ゼーの」

手拍子を取りながら真顔で歌う 『アブラハムの子』。

右手、左手、右足、左足、頭、と歌いながら踊り続け

て、

頭をぐるぐる回しながら踊っている途中で、曜子が倒れる。

後輩たちがあっと思う間もなく、柿生が栗次郎に掴み掛かり、殴りつける。

後輩たち、慌てて曜子を助け起こし、自主的に歌い出す。

柿生がそちらを見た隙に、栗次郎が逃げ出す。

怒声をあげ、栗次郎を追って去る柿生。

後輩たち、しばらく歌い踊り続けるが、柿生の姿が見え

なくなると、どっと緩む。

げんなりした顔で待機席に戻る月山と日比。

曜子と桃太は箱を元の位置に出して、落ち着く。

（#8 ファミレス に戻る）

桃太 ……柿生先輩も、人生積んでるよな」

曜子 「くりじい、大丈夫なのかな」

桃太 「いや、学校来てるくらいだから、相当やばいっしょ」

曜子 「でも、学校にいと、柿生先輩に捕まるんじゃないの？」

桃太 「学校には来ねえよ」

曜子 「部活に乗り込んで来たらヤバイよね」

桃太 「柿生先輩、卒業してから学校には来ねえんだって」

曜子 「なんで？」

桃太 「知らね」

曜子 「え、だって、くりじい、シェルターにいたときも見つかって

乗り込まれてシェルター追い出されたんでしょ？」

桃太 「学校に泊まってこうかなって言ってた」

曜子 「晋のテレビドラマみたいにさ、不良が集まって金属バット担

いで、くりじいどこじゃ、うりゃあって教室の窓ガラス割り

に来るんじゃないの？」

桃太 「ねえよ」

曜子 「ぐりじい、今度は何チョッパったんだろ」

桃太 「知らね」

曜子 「……桃太、疲れてるね」

桃太、怠そうな動きで席を立つ。

曜子 「桃太」

桃太 「おしっこ」

桃太、客席後方のトイレに入る。

ジャージャーと水を流し続ける音（S E）。

曜子 桃太が、薬をやっているのは、みんな知ってる。最初は精神安定剤かなんかだと思ってたけど、今はそういうんじゃないかと、  
て、  
もっとやばいものになってるのも、みんなわかっている。中学の  
ときの同級生にも、一人いた。その同級生は女の子だったけど、  
その子は中3の夏休みの間に激ヤセして卒業式のと  
きに学校からいなくなっていた。担任は何も言わなかったけど、

卒業証書もらうときに、その子の名前が呼ばれて、みんなぎよっとして、父兄の席からその子のお母さんが泣きながら出てきて校長から卒業証書を受け取ってたから、死んだんだなってわかった。だから、高校に入って桃太を見たとき、こいつもかって思った。痩せる前の、いつも眠そうだったあの子とおんなじとろんとした目で背中丸めて、誰とも口を利かなくて、学校にもあんまり来てなくて、たまに来ると、激ヤセしてる。ご飯食べないし、長袖だし、宇宙の話とかするし。でも、正直、桃太が書く戯曲はぶっ飛んでて面白いから、誰も何も言わない。言わないけど、桃太には、生きて無事に卒業して欲しいって、みんな思ってるし、大学行って演劇続けて欲しいよねって、みんな言ってる」

## # 9 シェルター（並行）

大きな音を立てて外扉が開けられ、柿生が入ってくる。待機席の栗次郎、飛び上がって逃げ出そうとするが、一足速く柿生が栗次郎を捕らえる。

柿生、栗次郎の頭をテーブルの上で押さえつける。

## # 10 ファミレス（並行）



桃太を待てなくなった曜子、スマホで桃太にメッセージを送る。

曜子 「モモタ、うんこしてんの？ カテキョだから先帰るね」

桃太からの返信を確認して、席を立つ曜子。

曜子 「……受験かあ」

小さくため息をついて去っていく。

## # 1 1 シェルター（並行）

柿生 「どこ隠したんだよ」

テーブルに抑え込まれた栗次郎を詰問する柿生。

くり 「いや、まじ俺じゃないから」

柿生 「てめえしかいねえだろ」

くり 「知らないって、まじ」

柿生 「てめえにしか見せてねえんだよ」

くり 「俺じゃないよ、柿生くん、信じてよ」

柿生 「返せよ、俺の遊戯王カード」

くり 「だから、知らないって」

柿生 「知ってんだろ 《デーモンの召喚》だよ、あれウルトラレアなんだぞ」

くり 「知ってる、アジアチャンピオンシップ2001でしょ」

柿生 「二位の賞品より高値なんだぞ」

くり 「え、そうなの」

柿生 「150万で買うって人がいるんだよ」

くり 「す、す、すごいね」

柿生 「てめえが盗んだんだろ」

くり 「知らない、ほんと、知らない」

柿生 「俺が遊戯王カードのコレクターだってこと知ってるんのお前しかいないんだよ」

くり 「ど、と、トレーディングとかしてたよね」

柿生 「ウルトラレアカード保持者のカッキーと俺は別人なんだよ」

くり 「別人て、なに」

柿生 「バンドルネームだよ」

くり 「す、す、すごいね」

柿生 「てめえ、俺がコレクターだってこと、誰かに喋ってないだろうな」

くり 「しゃべってない、しゃべってないよ」

柿生 「喋ったら、埋めるぞ」

くり 「わかった」

柿生 「幼馴染でも容赦なくやるからな」

柿生、栗次郎を押さえつけていた力を緩める。

## # 12 ファミレス（並行）

桃太がスマホを耳に当ててトイレから飛び出してくる。

桃太 「え、なに、月山、見たの？」

月山 「見た、柿生先輩、鬼の形相で走ってた」

待機席の月山が椅子の上に立ち上がって、桃太と通話している。

桃太 「やべえ」

月山 「やべえな」

桃太 「つうかさ、お前いまどこ？」

月山 「バイト、バイト」

桃太 曜子、先帰っちゃったんだけど、来てくれない？」

月山 やだ。なんで」

桃太 拒否が先かよ、俺、財布ねえんだよ」

月山 財布あっても金がねえんだろ」

桃太 「それな」

月山 「どこ？」

桃太 「バーミヤン」

月山 北京ダックのコースとか頼んでないだろうな」

桃太 頼んでねえよ、頼んでたってしよせんバーミヤンだよ」

月山 「ふうん」

桃太 悪いな、俺、食い逃げとかする勇氣も知恵もないからさ」

月山 「やだ」

桃太 「つきやまー」

月山 「バーミヤンを噛うものはバーミヤンで泣け。じゃあな」

月山、通話を切る。

栗次郎、地べたに座っている。

柿生、離れたところで石を蹴ったり投げたりしている。

くり 柿生くん、お母さん、元気？」

柿生 「ああ、元気だよ」

くり 「そっか」

柿生 栗次郎のお母さん、歯、治った？」

くり 「うん。差し歯にしたみたい。今は肋骨と大腿骨にギプスして  
る」

柿生 「そっか。可哀想だな」

くり 「うん、ありがとう」

柿生 俺さ、今だから言うけどさ、お前のお母さんのこと、好きだ  
った」

くり 「え、それっていつくらい？」

柿生 中学入るくらいかな」

くり 「そっか、まだ柿生くん、よくうちに来てた頃だ」

柿生 「うん」

くり 「あの頃は、まだうちのかーちゃんも顔ポコポコじゃなかった  
しな」

柿生 「うん」

くり 実 は 俺 も さ

柿生 「ん？」

くり 今 だ か ら 言 う け ど

柿生 「うん」

くり 「いや、やっぱやめとく」

柿生 「なんだよ」

くり 俺 も、た ま に 柿 生 く ん ち 遊 び に 行 っ て た じ ゃ ん

柿生 遊 戯 王 カ ー ド 盗 み に な

くり 「それはあの時だけだって」

柿生 「わかってるよ」

くり 「でも、ほんとは、盗んだんだよ」

柿生 「ああ？」

くり 「《デーモンの召喚》じゃないよ、盗ったのは、か、か、柿生

く

んの、お母さんのパンツだよ」

柿生 「……そっか」

くり 「うん……ごめんね」

柿生 「ぐっそ、じゃあ俺のウルトラレアカード、誰が盗んだんだ

よ

くり 「ヤバい取引なの？」

柿生 「ヤバいっつうか、まあ…… そうだな」

くり 「そっか。やばいな」

柿生 栗次郎、ちょっと頼みがあるんだけど」

くり 「なに」

柿生 俺、命賭けても俺のウルトラレアカード探し出すし、盗んだ奴もぜってえ見つけ出して山に埋めるけどよ」

くり 「うん」

柿生 「もし、もしもだよ」

くり 「……」

柿生 逆に俺が埋められるようなことになったら」

くり 「ならないよ、大丈夫だって」

柿生 「ならないよ、ならないけどさ、もし、そうになったらって話だよ」

くり 「うん」

柿生 「そしたら、うちの下の部屋、あんだろ、わかる？」

くり 「えっと、柿生くんちの、一階下だっけ」

柿生 「ちげえよ、二階下。うちは三階じゃん？ だから、マンション」

の「一階」

くり 「じーちゃんちだったとこでしょ」

柿生 「そ」

くり 「あそこ、今どうなってるの？」

柿生 「倉庫」

くり 「柿生くん住めばいいのに」

柿生 「そう思ったんだけど、荷物移すのめんどっちいじゃん。どうせうち親殆どいないし、めんどっちいからいっかなと思ってさ、そしたら親がそのまんま、荷物入れて倉庫にしちゃったんだよね」

くり 「ああ、なんだっけ、お父さんやってたビジネス」

柿生 「永素水」

くり 「うん」

柿生 「そんでき、その倉庫にさ、行って欲しいんだよね」

くり 「え？俺が」

柿生 「だから、もし俺が山に埋められたら」

くり 「倉庫に行くの？」

柿生 「うん。鍵隠してるところ、覚えてる？」

くり 「あ、うん。え、倉庫行って、どうすればいいの？」

柿生 「俺たち、よくじーちゃんちで刑事ごっこしたよな」

くり 「そうだよ。あれが俺の演技の原点だから」

柿生 「そっか、そうだな。俺もそうかも」



くり 「いっつもじーちゃんが犯人役だったよね」

柿生 「じばるとびくびく痙攣してな」

くり 「だって、柿生さんの刑事、すっげえ怖いんだもん」

柿生 「ほか、演技だよ、演技」

くり 「柿生くん、今からでも俳優目指したらいいのに」

柿生 「ごっこ演劇じゃ勝手が違うだろ」

くり 「そうかな、だって高校演劇なんてみんなさ、ネクタイつけてお父さん、エプロンつけてお母さん、みたいなことやるんだから、ごっこおんなじじゃない？」

柿生 「高校演劇やってる連中って、卒業したあとどうすんだろうなあ。高校野球や高校サッカーだって、プロ入りする奴なんて数えるほどだろ、野球だってサッカーだって演劇だって、頑張ったからってどうなるわけでもねえしさ」

くり 「でも、みんな頑張っちゃうんだよね」

柿生 「そうなんだよ。俺も頑張っちゃったもん。でもさ、あれって何に向かって頑張ってたんだろって、時々思い出して、

謎」

くり 「柿生くん、めっちゃ走り込みとかしてたよね」

柿生 「まあ、今更だけどさ、演劇とか向いてねえよ、俺」

くり 「そんなことないよ」

柿生 「お前が演劇やってるから、俺はいいんだよ」

くり 俺、柿生くんと一緒にマクベスとかやりたかったなあ」

柿生 あ、俺も、シェイクスピアは結構リスpektしてる」

くり 「でしょ、柿生くんいたら絶対全国行けたよ」

柿生 全国大会な、行ったら革命的だったな」

くり 「そうだね」

柿生 演劇は小難しいけどさ、ごっこは楽しいよな」

くり 「うん」

柿生 「いやあ、まじ俺、演劇部やってた頃、青春って感じだった」

くり 「……うん」

柿生 「アッな毎日のこと忘れられるしな」

くり 「うん」

柿生 「まじシェイクスピアは偉大だよ」

くり 「……柿生くん、演劇好きなんだね」

柿生 あのととき、じーちゃんが死ななきやな、俺も演技愉しめたか  
もしないけど、やっぱ、つらくなっちゃうんだよ。俺が演  
技にタマシイ入ってじーちゃん的首絞めたりしたから」

くり 事故だよ、それか寿命」

柿生 「そうだな」

くり 柿生くん、もう一回、演劇やろうよ」

柿生 「ほあ？」

くり 「やろうよ、シェイクスピア」

柿生 「俺はいいって。お前がやれよ」

くり 「だからさ、一緒にやろ」

柿生 「お前ダブってるけど俺もう卒業してるもん」

くり 「だから、俺も卒業する、俺ちゃんと学校行って卒業するか  
ら、

部活じゃなくて、本気の劇団作ろう、そんで一緒に頑張っ  
て、

シェイクスピアとか、つかこうへいとか、キャラメルボック  
スとかやろう」

柿生 「なあ、お前、覚えてるよな。刑事ごっこでじーちゃん死んだ  
とき、お前言ったろ、俺たち人殺しだねって」

くり 「え、」

柿生 「やべえ死んじゃったよ、どうしようって泣いてる俺の横で、  
俺たち人殺しだね、って言ったあん時、お前の目、キラキラ  
してたんだよ」

くり 「あれは、だって、事故だよ」

柿生 「それか、寿命な」

くり 「うん」

柿生 寿命だな」

くり 「うん」

柿生、不意に歩き出す。

柿生が立ち去ると、栗次郎がぼそぼそと喋り出す。

くり  
柿生くんは、相変わらずバカだった。変に敏感なところがあるから、柿生くんと話すときは心底リスペクトしてるふう演技しなきゃならない。昔っからずっとそうだ。刑事ごっこでじーちゃんを縛り上げて殺しちゃったり、小学校の駐輪場に放火して保護観察になったり、盗んだ銅線売りさばいてヤクザに拉致されたり、何やっても捕まるのは柿生くん、仲間はずに絶対に裏切らねえとか突っ張ってるうちに柿生くんが仲間だと思ってた連中は次々柿生くんを見捨ててった。今じゃ柿生くんは一人親方って呼ばれてる。でも、演劇部ではむしろ俺らのアイドルみたいなもんで、柿生伝説とかってまじ爆笑もんだし、結構おいしい立ち位置だったのに、じーちゃんのこと、亡霊に取り憑かれたマクベスみたいになって、柿生くんは地区大会の本番中に審査員席にダイブして、顧問から出入り禁止にされたまま、俺より1年先に卒業してった」

喋りながら服を脱いでいき、パンツ一枚になっている栗次郎。

最後に、パンツの中から遊戯王カードを取り出し、しげしげと眺める。

くり 「ワルトラレアな遊戯王カードが、この一枚で150万、俺のバイトは時給1050円、親父のギャンブルの借金が1500万、かーちゃんの治療費、保険が出ても自腹で15万、福島第一原発敷地内での放射線量測定は1日3時間の研修期間でも日給15000円、ユニクロの中国工場で働く人の賃金は月額1550人民元、てゆうか、まじ俺らはもうどこにも行き場とかないわけで、俺らが働く年になる頃には今ある職業の何割かは人工知能にとって代わられてるわけだし、仮にうまいことなんかの仕事にありついて、奇跡的に結婚して家族を持ったとしても、恐らくマイホームとか持つ前に、もしくは持った途端に失業して路頭に迷う羽目になるのは必須だ、  
20年後には47%の職種が人工化されるっていう絶望的な未来において、僕らがまっとうに希望を抱いて過酷な毎日を

と

生き抜かなければならない必然が、義務が、飲びが、どこにあると言うのだろう、それでも俺らはへらへらと、辛いことなどまるでないような顔をして、生きなければなりませんか？ そんなふうには生きているのに、その上で世の中の人びが思い描く通りに希望に満ちた若者のふりまでしななければならないと、がむしゃらになれば真っ直ぐな人生を歩けると、よたよたと先を歩く人たちに言われます、だけど、絶望の権利は僕らにだけあってある、僕らには、絶望という名の希望だけがあるのです」

待機席にいる曜子・月山・桃太が、栗次郎の演技に拍手を送る。

転換。

待機席の三人が、話しながら箱を組み直す。

## # 14 部室

ぜえぜえと息が上がっている栗次郎、台本を読み直したりしている。

桃太 予げえ、脱いだけで一瞬にしてアングラの香りが漂った」

曜子 漂ったねえ、ぷーんときた」

くり 人生最大の台詞量」

桃太 「そんなことは、ない」

月山 あれ」

曜子 「え、でもさ、桃太、卒業生有志の公演は後輩に演劇とはを問うためにもぜひ銀河鉄道の夜をやるべきだって言ってなかった？」

月山 「ねえ、ビービーに会った？」

くり 「言ってたよね」

曜子 「それで、これ？」

曜子 「ぜんぜん銀鉄じゃないし」

月山 「ねえ、ビービーって、今日、学校来てた？」

曜子 「え、なに？」

くり 「俺、会ってないけど」

桃太 「それよか、スズキはどうしてやってこないのか」

月山 「スズキはわかんないよ、誰か2年に聞きなよ」

曜子 「スズキ、やめちゃうかもよ、反省会んときもいなかったじゃん」

月山 「ね、ビービー、今日来てた？」

曜子 知らない。机に花瓶置いてあったからいなかったかも」

月山 花瓶ってなに」

くり 「なに、あいつ、いじめられっ子なの？」

曜子 遅うけどさ、よく自殺しちゃった子の机とかに、花置くじゃん」

桃太 ライン、でねえな」

月山 「ビービー？」

桃太 違う、2年呼んでんの、今」

### # 15 倉庫（並行）

大きなハサミを手にした柿生が、少女の近くに立っている。

柿生 「おまえ、演劇部なの？」

少女 っ」（がくがくと頷く）」

柿生 「2年だろ」

少女 っ」（頷く）」

柿生、少女を縛っているガムテを服ごとハサミで切っ



て、

少女を自由にする。

スリッパ姿になった少女、がくがくと震える足で、縛り付けられていた椅子から立ち上がる。

少女、自分の手で、口に貼られたガムテを剥がす。

少女 「でも、わたしたちはどこにもたどり着けない、っていうか、

わたしたちが歩いた分だけ、いや、私たちより、何倍も、何十倍も速く、宇宙とか、世界とかも広がってて」

ふらふらと歩こうとする少女を、柿生が、後ろから抱き  
竦める。

少女 「どんなに遠くに来たつもりでも、そこは、やっぱり 《どこでもないどこか》 ではないんだな、って」

少女を抱き竦めた柿生が少女にプロンプをするように背  
後から囁く。

柿生 「たどりつけないんだ、宇宙の果てには」

柿生、少女を背後から愛撫しながら、囁き続ける。

柿生 明かりの当たった舞台の上に立って客席を観るだろ、真っ暗で、深くて、遠くて、何も見えないんだ。自分の手を延ばしても、指先が闇の中に消えてくくらいに、宇宙の果てのような闇だ」

柿生、背後から少女の首をじわじわと締め上げていく。

少女 宇宙はどんどん広がっていく。だから、人間は、（ずっとひと

りだ）」

少女、全身の力を振り絞って柿生を突き倒して、逃げ出す。

尻もちをついた格好で、ぽかんとする柿生。

# 16 部室であり、倉庫であり、どこかであり

月山 「あ、やっべー、今日あたし同伴だった」

桃太 「ふざけんよ、お前これ以上練習休むんなら有志公演出さな  
いからな」

月山 すまんすまん、背に腹は変えられんのでな」

月山、部室を出て行く。

日比の声がかすかに聞こえる。

日比 「つきやま」

日比が、部屋の一角で一人黙々と箱を積み上げている。

桃太のスマホにラインが届く。

日比を探す月山が走ってくる。

柿生、ぼんやりと少女が残した言葉を反芻する。

桃太 「まじか」

くり 「スズキ？」

桃太 「日比」

曜子 「ビービー、どこにいるって」

桃太 「やっぱ死んだみたい」

曜子 「まじか」

積み上げた箱によじ登った日比が、遠くに手を振る。

日比 「つーきーやーまー！」

月山が、ふと立ち止まって、振り返る。

桃太 彼女がいなくなったことには、気づいていました。いつかなくなるような気がしてもしました。彼女の机に花瓶を置いたのは曜子だということも知っていました。かつては、曜子も同じことをされたと、聞いていました」

曜子 あー、みんなクソツタレだなあ」

日比、ゆらりゆらりと揺れて、消える。

月山、立ち尽くしている。

桃太 僕は、なんて幼いのでしょうか。幼いうちは毎日がずうっと陽気で、何もかもが愉しくて嬉しくて仕方がないなどと思っているのだから、思い違いもいいところです」

桃太、不意に床にうずくまり、猛烈な勢いで台本を書き始める。

書きながら、叫ぶように話す。

桃太 確かに『幕が上がる』は見ています。ももクロが好きなんです。そうです、モノノフなんです。演劇関係なくたって『幕が上がる』は観るんです。何度観ても笑ってはいけないところで笑ってしまうのですが、都合五回以上はDVDで観ています。白状しますが、泣きました。冒頭の、地区大会が終わった演劇部員たちが美術セットを壊してドラム缶で燃やす場面で泣きました。煙が目に染みたのです」

外扉が開けられ、少女が走り込んでくる。

柿生、少女とすれ違って、外扉から出て行く。

くり 柿生くんは、いなくなつた。それとも、もしかしたら山に埋められたのかもしれない。どっちにしろ、柿生くんはいなくなつた」

曜子 昨日、品川区に住む16歳の女子高校生が、通りすがった見

知らぬ男にビニール袋を被せられて、拉致監禁される事件が起きました。その後、女子高校生は自力で逃げ出し、自分が通学する学校に戻ってきたことから事件が発覚しました。警察は、女子高校生の証言から、監禁されていた中野区のマンションの部屋を特定し、その部屋に出入りする22歳の男の行方を追うとともに、周辺で事件を目撃した人がいないか捜査を続けています。逃げ出した女子高校生は無傷だということです」

声が聞こえているうちに暗転し、口々に台詞の練習をする演劇部員たちの声が聞こえてくる。

## # 17 部室

月山 「だって、いつか日常からふっと消えてしまうのはわたしかもしれないし、わたしがわたしのまま毎日を行くのってサバイバルだなあと思う」

明るくなると、台本を手にした部員たち。

少女 ぎびしい人生は、お金を稼ぐようになってから始まるわけではない。そこで始まるわけでも、終わるわけでもない」

曜子 「こうやって当たり前のことを言うのは、うぬぼれてもらいたいからでも、不安にしたいからでもない。どうか幸せであって欲しい、毎日がずうっと陽気で、何もかもが愉しくてうれしくて仕方がないようであって欲しいと、言われていました」

くり 「ガードを固めることだ。パンチを食らっても、耐えられるようになれば、でないと人生最初の一発でふらふらになる、打たれ強くなれ、最初がちゃんとできれば、半分は勝ったようなもの、余裕があれば、大切な、二つめのことが証明できるんだから」

桃太 「ごめんなさい、私はこの時少し他のことを考えていました。将来の目標、自分のイメージする世界、驚くほど浮かんでこないんです。私の世界はどこにあるんでしょう」

月山 「まあ、世の中ってのは大概が、『わたしのいないところ』ってことですね。自分の周りにあるのが世間じゃない。自分がいるところも世間じゃない。世間ってのは、常に、『わたしが

ないところ》ってことですよ。だから、そこにいるわたし  
が、

わたしじゃなくて当たり前なんです。」

少女 「わたしにも物語があります」

曜子 肖像画というよりは、むしろ抽象画だけど」

月山 勇気とか、賢さとか」

散々台本を書き散らした桃太、今はひとり算数の教科書  
を読んでいる。

桃太 「13は、自明ではない約数を持たないので素数である。しか  
し14は、2と7で割り切れるので素数ではない。すべての  
数は、素数であるか、または素因数に分解できるかのどちら  
かで、素数は0から100までのあいだに25個ある。しか  
し、100から200までのあいだには21個しかなく、2  
00と300までのあいだには16個しかない」

音楽。

少女 賢さのない勇気は、乱暴にすぎない」



曜子 勇気のない賢さは、冗談にすぎない」

くり 俺たちは飛べない」

桃太 行くぞ、全国っ！」

少女 「おお！」

唐突に雄叫びを上げた桃太と、応える少女をちらっと見て、ぼんやりする演劇部員たち。

桃太 「なんてな」

くり 「いいなあ、桃太、卒業できて」

桃太 「あー、俺これから毎日何しよう」

月山 「あたしたち、生き残っちゃったね」

曜子 「生きていきましょよ」

月山 「ぞだね」

音楽が高まる中、溶暗。

やがて、明暗して、カーテンコール。

